

殷代の蝗

今井秀周

はじめに

地平線の彼方に黒雲が湧き上がる。黒雲は非常な速さで広がり空を覆っていく。するとその暗くなった空から突如バツタが降ってくる。無数のバツタが降ってくる。黒雲に見えたのは、翅が大きくなり巨大化したトノサマバツタである。バツタは手当たり次第に植物に群がり、植物を食む。植物を食い尽くすと、バツタは再び舞い上がる。黒雲となり風に乗って、また別の土地へ移動していく。このバツタと、バツタによる食害を蝗という。

一旦蝗に襲われると、作物は根絶やしにされる。この結果飢饉となり、人々が餓死したという歴史記録は、枚挙するに暇がない。明の徐光啓は、この蝗害を、水害と旱害とならぶ三大災害の一つに数えた⁽¹⁾。蝗は、洪水や旱害に比べれば脅威の度合いは低い。しかし蝗はたいいてい洪水や旱害の後に生じ、辛くも守り抜いた作物を結局全て奪っていく。まさにとどめを刺す災害として恐れられたのである。

拙稿では、中国殷代の人々がこの蝗害にどのように対処したかを明らかにする。筆者は以前「中国蝗災対策史-蝗は天災か人災か-」において、とくに思想・哲学面に注目して、中国における対策史をまとめた⁽²⁾。但しこの中で扱った時代は、周以降であり、殷代には触れなかった。殷代には文献資料がなく、蝗の事実や関係する思想・哲学を伺う術が無かったためである。しかし近年甲骨文字の解読が進み、殷の歴史や社会が、かなり具体的に捉えられるようになった。甲骨に彫られた文いわゆる卜辞は、殷人が政治・軍事・生産等の国の大事について一々神に伺いをたてたものであり、この卜辞から、彼らが貞卜という宗教儀礼をもとに祭政一致の国家を営んでいたことが明白になった。そうであるならば、蝗は恐るべき自然現象であったから、卜辞中にはきっと蝗発生が記されているであろう。またその卜辞を読めば、殷人が行った蝗への対処を知ることができるであろう。筆者はこのように思い立ち、先学の研究に拠ってここに卜辞の読解を行った。

1. 殷に蝗害があったか

最初に、殷の国に蝗害があったことを確認する。中国

には大河の流れる広大な平原が広がっているが、どこにでも蝗害があったわけではない。頻繁に起きるところもあれば、全く起らないところもあった。もし殷に蝗害が無かったとすれば、卜辞をいくら調べてもそれは見つからないことになる。

この点については、蝗の生態に関する調査研究によって確かめることができる。図1はそうした調査研究の一つから引いたもので⁽³⁾、この図を見れば、殷の国に蝗害があったことは確実である。殷の墓が多数発掘され、文字が彫られた多数の甲骨が発見されたのは、河南省の安陽であるが、この安陽は、図中◎印で示した位置にある。図中の・印は、飛蝗が観測されたところ、→印は蝗の飛翔ルートを示している。図1によれば、安陽は蝗害が起きる地域にある。

もう一つ図を引く。図2は歴史資料によって作られたもので⁽⁴⁾、図中の・印は、明代にあった八蜡廟や蟲王廟、劉猛將軍廟の位置を示している。こうした廟の多くは、今すでに姿を消している。八蜡廟とは、周王朝が農耕に関する八つの神を祭ったものが、やがて民間に広まったもので、第八番目の神が昆虫の神であり、その中に蝗が含まれていた。蟲王廟とは、蝗を最も恐ろしい昆虫と見て、防災のために祭ったものである。劉猛將軍廟というのは、誰を祭ったものか、民間の俗神であるため不詳であるが、蝗を駆除し、早に雨をもたらす神として信仰を集めたものである⁽⁵⁾。こうした祭廟は、みな蝗害を恐れて建立されたものであるから、この廟があったところは、即蝗の被害を被った地域と見ることができる。この図にも安陽の位置を◎印で示した。安陽の位置は、やはり廟が密集する地域の只中である。

このように現代の生物学調査や歴史研究によれば、むかし殷の国に蝗害が発生していたのは確実である。殷は三千年以上前の国であるから、そのときと今とは自然環境が変化しているであろう。しかし治水の状況は昔ほど悪かったから、殷代の被災地域が今より狭かったとは考えられない。

2. 甲骨文字中に蝗を探す

殷には必ず蝗害があったという前提で、甲骨文字を集



図1 東アジア飛蝗遷飛路線図

めた資料目録『甲骨文編』を調べると、意外と簡単に蝗らしき文字が見つかる⁽⁶⁾。その文字を図3の1から40に示す。

しっかりと伸びた触角、複眼を象ったのであろう四角な頭部、硬そうな体、そして背中に翅が付いている。まさにトノサマバッタをそのまま写した象形文字である。字の形が様々であるが、どれにも特徴的な触角があり、

すべて同じものを表した文字と見ることが出来る。字体が様々であるのは、文字が様々な貞人すなわち占い師によって彫られたことによるものであろう。

ところが『甲骨文編』は、この文字を蝗とは積していない。藁と積し、亀の字に附して載せている。藁という文字は、漢代の字典『説文』に無い。このため仮に藁と積し、意味不明と判断したようである。

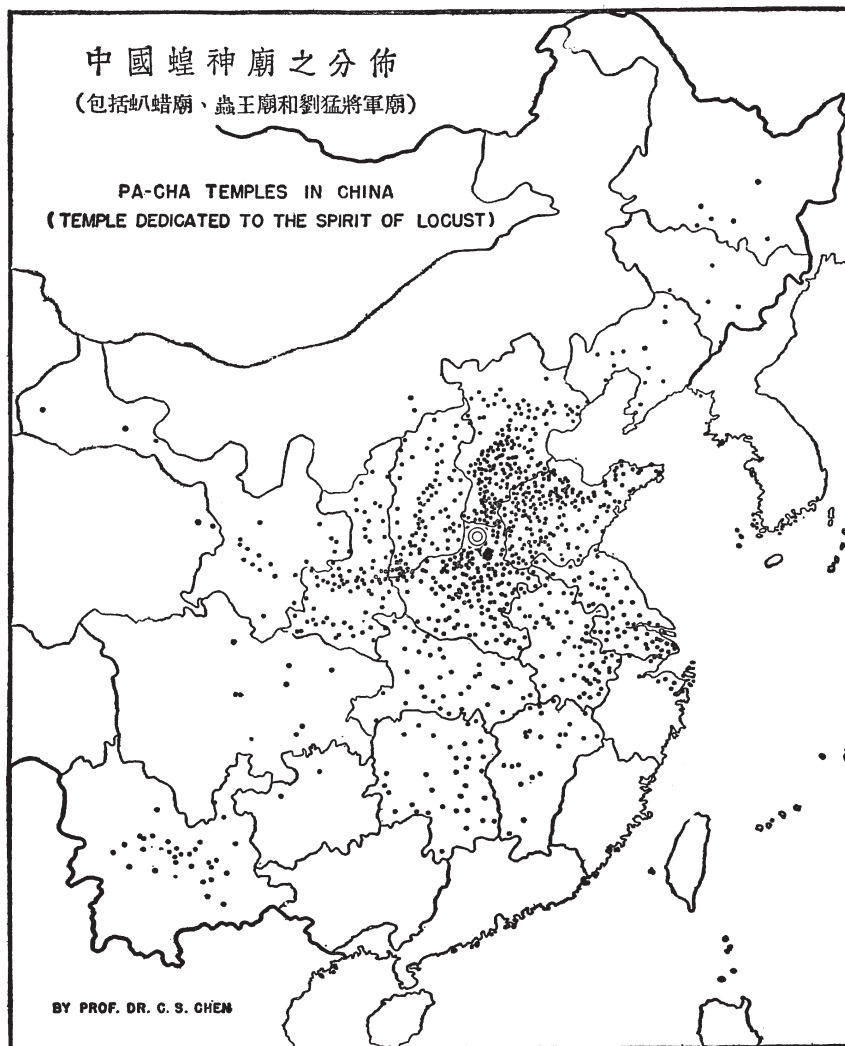


図2 中国蝗神廟分布図

『甲骨文編』が図3の1から40の文字𧈧を龜と積したのは、体の部分が龜を表す字とそっくりであり、触角部分を草冠としたのであろう。因みに龜と積される甲骨文字の幾つかを図4の1から6に示す。これを見ると、確かに硬さを表現している甲羅の部分は𧈧と同じであり、足の形も𧈧と同じであり、頭部も𧈧と似ている。このため龜と関係した文字と見たのも、無理は無い。しかし龜に、触角や翅はない。

筆者はこの𧈧は、龜と関係させず、蝗とすべきだと考える。その理由は、すでに述べたように字の形が全く蝗の形であることと、この文字が使われた卜辞の内容である。次に卜辞のいくつかを挙げて、それを証したい。拙稿で使用した卜辞は、これまでに発見された卜辞の大部分を取めた島邦男『殷墟卜辞綜類』⁽⁷⁾による。表1にその中から𧈧字に関係した部分を全て引き、筆者が読解した積文を付した。積文には既に𧈧を蝗としてある。このあと拙稿中で卜辞を使用するときは、表1に付けた通番を記すことにする。

まず表1の40を見ると、
 …蝗^{あが} 𧈧る。…寧さんか。
 とある。𧈧字は『説文』(巻4下)に「并拳なり」とあり、みな飛び拳がるという義である。したがって、この卜辞から、𧈧は飛揚、飛行したものであることが分かる。寧とは、寧息の義。つまりこの卜辞では、荒ぶる蝗を安んじるために祭祀を行ってよいかと、神に問うているのである。

次に45を見ると、
 …兪…蝗…𧈧って商に至らんか。六月。
 とある。兪の意味はよく分からない。商とは、殷の自称である。したがってこの卜辞から、𧈧は飛行して移動したものであることが分かる。

次に52、53を見ると、
 丁酉、貞う。蝗 集まらざるか。それ蝗 集まらんか。
 とある。52と53は、同じ骨版に刻まれた卜辞である。丁酉は日付を示す干支である。貞は、問うと読み、貞卜すなわち甲骨を焼いて占卜し、神に問うことである。し

たがってこの卜辞から、𧈧は集まる性質を持つものであることが分かる。

次に 22 を見ると、

貞う。蝗あり。…それ…の^{たたり}𧈧を告さんか。

とある。𧈧とは、神の祟り、つまり災禍をいう。したがって、この卜辞から、蝗は災禍を起こすものであることが分かる。告は告祭。これについては、第4章で述べる。

要するに以上の卜辞から見れば、蝗は集団で飛行して移動し、人々に災禍を齎すものであることが明らかである。これと𧈧という形状を合わせれば、𧈧は間違いなく蝗を指す文字だと言える。

なお𧈧の様々な字形を区別して、腹部の先が尖っているものを蜜蜂だとする説がある⁽⁸⁾。確かに図3の7、9、11、12、14、38などは腹部の先が尖っていて、それが針のようにも見える。しかしこれらの文字が彫られた卜辞の文面を見ると、確かに蜂だと解釈できるものはない。尖った部分は、文字を彫る時に腹部を描く線が長くなったものかと思うが、とはいえ12のように尖ったものが横に向いているものもある。もしこの尖った部分が意識的に描かれたのだとすれば、これはおそらく雌の産卵管を示すものであろう。周代に書かれた『詩』に、蝗のすさまじい繁殖力を称えた歌が載っており、殷周の人が蝗の産卵管に注目していたことが推察される⁽⁹⁾。

3. 𧈧の字義

さて筆者は前章で甲骨文字の𧈧は蝗だと断言したが、しかし先行研究の中にはそう積さない説がある。どのように積するかというと、それは蟬と夏である。𧈧は蟬を象ったものであるとし、蟬を夏の仮借とするのである。そう解釈した学者のひとり葉玉森は次のように論じている。「𧈧はみな蟬の綏首に翼と足を象ったものである。蟬は夏の虫である。その声を聞くと、夏になったことが分かる。ゆえに先哲は蟬の形を仮りて夏を表したのである」と⁽¹⁰⁾。たしかに季節は具象的なものでないから、仮借によって表すしかないであろう。しかし𧈧を蟬と見ることにはできない。なぜなら表1に引いた𧈧の卜辞を見ると、𧈧を恐れた内容ばかりだからである。蟬は人が恐れる昆虫ではない。因みに、郭沫若は図4の7に引いた文字を蟬、蟬祭だとしている⁽¹¹⁾。この他にも𧈧を、蝦蟇、泥鰌、大亀などとする説があるが、しかしどれも人が恐れるものではなく、前章で述べた𧈧の特徴にも合致しないから、全く承服できない。𧈧の原義は蝗である。

𧈧を夏の仮借とする説は、『甲骨文字字源総覧』⁽¹²⁾によれば、葉玉森のあと董作賓、朱芳圃、田倩君、魯實先らによって1960年代まで説かれた。しかし島邦男が



図3 『甲骨文編』所載 蝗及び蝗関係甲骨文字

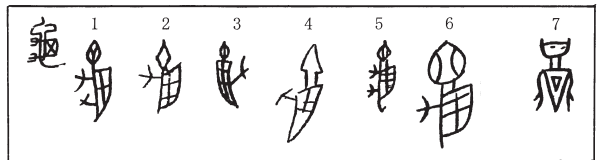


図4 『甲骨文編』所載 蝗類似の甲骨文字

𧈧を蝗とし、秋の仮借だと論じたあと、貝塚茂樹、池田末利、李孝定、于省吾、徐中舒らが大体同じ解釈をするようになった。

それなら𧈧を季節と解する場合、夏と見るのが正しいのだろうか。それとも秋と見るのが正しいのだろうか。これについては、近年は秋と解する学者が多い。しかし筆者はこの解釈を疑問に思う。𧈧を秋と解する根拠は、一つには秋が実りの季節であり、殷人が蝗に大切な稼穡

を害されるのを恐れたであろうということ、もう一つには、蝗はむかし蝻という文字で書かれ、その蝻の音シュウと秋の音シュウが通じていることのようなのである。たしかに蝗という文字が使われるのは秦以降であり、周代に著された『春秋』は、蝗を蝻と記している。しかし筆者は秋に限定しない方が良く考える。

表1を眺めると、殷に蝗害が起きた時期を記した卜辞が7つある。6、13、14、59には4月とある。45、55には6月とある。106には7月とある。106の文字は𧈧ではなく、𧈧の下に火が付された𧈧である。これは𧈧の焼殺を象った文字だと考えられる。『甲骨文編』(巻10)にある字形を図3の43から49に引いた。ただし103から106の卜辞を見ると、𧈧は全て「今」の字と成語になっており、時節を表している。以上七つの卜辞を見ると、殷では4月から7月にかけて蝗害が発生していたことが分かる。つまり蝗害は夏から秋にかけてであったのである。彭邦炯は、殷の6月は農暦の7、8月に当たるとしている⁽¹³⁾。

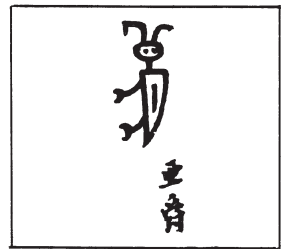
第1章に示した図1の調査研究によれば、黄河地域においては、越冬した蝗の卵がかえり始めるのは4月ごろで、それがやがて3世代にわたって子孫を産み続け、5月から10月にかけて飛び回るといふ。卜辞に記された蝗害の時期は、この調査の結果と一致している。

そもそも甲骨文字を見渡しても、春夏秋冬の四季それぞれについて、はっきりと示す文字がない。𧈧や𧈧という文字は、春とも積せるし夏とも積せる。𧈧という文字は、冬とも積せるし終とも積せる。したがって以上のことから考えると、𧈧は夏、秋の片方ではなく、両季を合わせて「蝗が襲来する季節」と積するのがよい。表1の69から86に今𧈧とする成語が並んでいる。筆者はこれらの積文を今秋としたが、これは便宜的に入れたままで、厳密に言えば、「蝗が襲来する季節」とすべきだと考える。きっと殷人は季節をおおよそ三つに分け、草木が萌え出る季節を𧈧や𧈧とし、蝗が襲来する季節を𧈧とし、一年が終る季節を𧈧としていたのであろう。春夏秋冬と一年を四季に分けるのは、周代になってからのことであろう。

なお𧈧の文字には、バツタ名、バツタによる災害、バツタに食害される季節を示す以外に次の字義があった。

64から67の𧈧は、地名、部族名か人名だと考えられる。64と65は同じ版に彫られた卜辞で、64には「貞う。誰が芻するに、𧈧に于てするか」とある。65には「貞う。誰が芻するに、𧈧に于てすることなきか」とある。誰は殷の臣下の名であろう。芻というのは、田野で草を刈ることをいう。つまりこの卜辞では、草刈を𧈧という地に於いて、あるいは𧈧族とともに行うことの可否を神

に問うている。𧈧の文字をそのまま使ったこの固有名詞は珍しいもので、おそらく蝗害対策で功績があった者と関係しているのではあろう。殷周の金文の資料目録



である『金文編』には、図5『金文編』附録上5に示した図形が収録されている。この形は明らかに蝗であり、これは上の𧈧の部族標識かもしれない。

また100、101の𧈧は、卜辞の文面から見ると、部族名か地名と考えられる。『甲骨文編』(巻2)はこれを𧈧という文字だと積した。図3の41と42である。しかし意味は不明だとしている。

4. 殷の蝗対策

(1) 駆除方法

この章では、殷人が蝗にどのように対処したかを明らかにする。

蝗が襲来したとき、殷の人々は蝗をどのように駆除したのか。この方法はいつの時代も同じである。叩き、埋め、焼くという方法しかない⁽¹⁴⁾。殷の人々が蝗を焼殺する技術を持っていたことは、前章に述べた𧈧の文字が示している。また𧈧という文字が「今秋」という成語で使われたことから、焼殺は習慣的に行われていたと考えられる。

このほか表1の93に「これ蝗あり。𧈧に令せんか」とあり、同じ骨版に「これ𧈧にて、𧈧に田せしめんか」とある卜辞も、蝗の駆除に関するものと考えられる。これは𧈧という地で蝗が発生したため、そこで𧈧に命じてこの駆除を行わせてよいかと貞卜したものである。田というのは本来田獵、つまり原野で狩猟を行うことであるが、この文面からすれば、蝗の駆除作業を言ったものと理解される。

しかし生まれたばかりの段階で駆除すれば相応の効果はあるものの、飛来した蝗を駆除するのは至難である。大規模な群れが飛来したら、必死で叩き、焼いたとしても焼け石に水である。このため殷人がもっとも頼りにしたのは、次節に述べるように神であった。殷人は貞卜の思想をもっていたから、蝗が来るか来ないかを予め占卜で神に問うた。また神が怒って蝗害をおこさぬよう、大祭を行った。もし不幸にして蝗が来たときには、蝗害の終息を願って臨時の祭祀を行った。

(2) 蝗害の貞卜

殷人が蝗が来るか来ないかと神に問うた事実は、次の

ように見える。

表1の56では、
庚申、トす。𠄎貞う。今歳、蝗 この商に至らざるか。
二月。

と問い、同版57で重ねて、

貞う。蝗 それ至らんか。

と問うている。𠄎は真人名である。商とは、殷のことである。

また52、53では次のように問うている。

丁酉、貞う。蝗 集まらざるか。

それ蝗 集まらんか。

また46では𠄎という地に蝗が飛来するかどうかを問うている。

…蝗 𠄎^{あが}に𠄎らざるか。

(3) 帝を祀る

殷人は蝗害を神の祟りと見ていた。表1の22がそれを示している。

貞う。蝗あり。…それ…^{たたり}𠄎を告さんか。

𠄎は𠄎と積され、祟り、災禍の義。卜辞には、神の祟りをいう𠄎、𠄎、𠄎という文字が沢山記されている。ただし、卜辞から神が災禍を下した理由を読み取るのは、難しい。

殷人は帝とよぶ神を崇拝していた。帝は自然界を司る最高神である。地上の最高位にある王は、重要なことは全て帝意を伺って決していた。帝を祭る大祭を禘祀という。禘祀に於て王は祟りをおこさぬよう帝に祈った。

表1の2から11は、蝗に関する禘祀の卜辞である。

2の卜辞では、禘祀のときにどの神を祀ればよいかを帝に問うている。

貞う。蝗を𠄎と土に禘せんか。

帝は形のない神であるから、帝を祭るための神卓の形^𠄎で表された。帝を祭る行為は^𠄎という形で表された。^𠄎はどのような神か不明。土は土地神。後世、社の主神となる。

7、8では、神が禘祀を受け入れたかどうかを問うている。

壬子、貞う。牛・米するに、帝は蝗せんか。

従いて牛・米す。帝は蝗せんか。

^𠄎は帝を表し、帝が主語になっている。「神意に従って牛を犠牲にし米粟を登升したが、帝は蝗害を起こされるだろうか」と問うている。

9、10も同様の貞卜であり、帝が邶に蝗を起こすか否かを問うている。邶は、都の北方の地をさす。

壬…、貞う。…米…。蝗あるか。

従いて牛・米す。帝は邶に蝗せんか。

11には、禘祀で玉を捧げたことが書かれている。

庚寅、貞う。蝗 大いに集まる。帝に五玉、臣寧せんか。祖乙の宗に在りてトす。

𠄎とは三つの玉を連ねたものを指す。「𠄎を五つ帝に捧げて、大臣が蝗を寧息させたいが、よいか」と帝に問うている。

5では、帝に、𠄎という人物に蝗対策として何かを命じられたかを確認している。𠄎にあたる漢字は不明である。

庚戌、トす。貞う。衆^{おお}くの蝗^あ侑り。それ帝は𠄎に令せんか。

殷はこのように蝗を国家の大祭に於ても祭った。殷の禘祀は、さまざまな場所で行われた。都の郊外で行われた禘祀は、後に皇帝が天地を祭る郊祀となったと考えられている⁽¹⁵⁾。

(4) 諸神を祀る

国家の大祭とは別に、国に大事が起こる度に臨時に行う祭祀を告祭という⁽¹⁶⁾。殷人は蝗害に直面すると、告祭して神に祟りを収めるよう祈願した。告祭で祀った神は、表1の13から32にあるように、自然神の河神や嶽神、そして祖先神であった。34から38の蝗を寧息した儀式も告祭と考えられる。

河神や嶽神は、いうまでもなく農耕の中心的神である。表1の15、16の卜辞では帝に河の神に告祭することを伺っている。

甲申、トす。賓 貞う。蝗を河に告さんか。

…未、トす。賓 貞う。河に蝗を(…)さんか。

16の(…)には告の字があったと考えられる。河とは黄河が神格化された自然神である。

17、28の卜辞では嶽神に告祭しようとしている。

乙未、トす。賓 貞う。嶽に蝗の𠄎を(…)さんか。

庚寅、…。嶽に蝗を告さんか。

17の(…)には告の字があったと考えられる。嶽とは、白川静は嵩嶽であろうといい、河神もその近くで祭られたのであろうという⁽¹⁷⁾。

荒ぶる蝗を安んずるために祭った祖先神には、蔑、夔、王亥、上甲があった。

19、29は、蔑に告祭しようとした卜辞である。

乙未、トす。貞う。蔑に蝗を告さんか。

…貞う。…蝗あり。蔑に…さんか。…牛。

19と29は字形が違うが、同じ蔑である⁽¹⁸⁾。蔑は、『史記』殷本紀に記される先公、すなわち神話的祖神の冥である。この蔑は、雨と関係する神で、時に水害を起こしたという。卜辞の中に「己未、トす。賓 貞う。蔑の雨ふらすは、それ𠄎か(『殷虚書契前編』六、七、七)」と

記されたものがある。

30 は、夔に告祭しようとした卜辞である。

…戊、貞う。それ蝗が集まれるを高祖夔に告さんか。
六牛。

夔は、『左伝』に王亥の兄と記され、『史記』殷本紀に昭明と記された神話的祖神である。六牛とは、犠牲として六頭の牛を用いることを伺ったものである。この夔は、よく嶽や河とともに祭られ、雨水と関係した神であった。卜辞の中に「戊午、卜す。賓 貞う。𠄎して禾を嶽・河・夔に奉らんか（『殷虚書契前編』七、五、二）」と記されたものがある。

20 は、王亥に告祭しようとした卜辞である。

貞う。王亥に蝗が𠄎るを告さんか。

王亥は、『史記』殷本紀に振と記される神話的祖神である。王亥は雨と関係していた。卜辞の中には、王亥が祟って大雨を降らせるかどうかを問うたものがある。「それ王亥は雨を𠄎するか。（同版）それ𠄎することなきか。（『殷虚書契前編』七五）」

23、24、27 は、上甲に告祭しようとした卜辞である。

それ蝗を上甲に告さんか。

それ蝗を上甲に告さんか。二牛。

従いて蝗を上甲に告さんか。

23、24 と 27 では字形が違うが、同じく上甲を指す。上甲は神名を徴といい、『史記』殷本紀に記された六示、すなわち神話的祖神と実在した王の間に置かれた祖神の一人目である。殷の世系では王亥の次に位置する。この上甲はよく河とともに祭られ、河や稔りと関係した神であった。たとえば「貞う。河と上甲とに凡せんか（『殷虚書契續編』一、五、四）」と記した卜辞がある。凡とは、祭祀名である。

以上見てきたところによれば、蔑、夔、王亥、上甲らの祖神は、いずれも河や雨と関係があった。河や雨は農耕と深く関係する自然である。殷人が蝗の時にこれらの神を祀ったのは、農耕に直結した神だったからであろう。

なお告祭のときには、同時に複数の神が祭られたことがあった。32 の卜辞には、神に犠牲を用いるのに、まず上甲から始めれば良いかと問うたことが見える。

貞う。来蝗を告するに、用いるに上甲自りせんか。

また告祭には、動物犠牲が欠かせなかったようである。犠牲の数を問うた卜辞を、すでに何例も見てきた。25、26 には𠄎という文字がある。この文字は意味がよく分からず色々な説が出されているが、これは徐中舒が説くように、𠄎と積し、犠牲を用いる礼を行うという意味にとるのが良いように思う⁽¹⁹⁾。

それ尋いて蝗を告さんか。

壬…。それ尋いて蝗を…に告さんか。

以上の他、蝗の祭祀については、また次のような卜辞がある。

36 では、祭祀の日取りを伺っている。

貞う。それ蝗を寧ぜん。きたる辛卯に𠄎せんか。

61 では、祭祀を行う場所を伺っている。

戊戌、卜す。𠄎 貞う。𠄎が、𠄎にて来る蝗を祀らんか。𠄎は真人名。𠄎は人名。𠄎は宮屋のことであろう。

50 には、𠄎という祭儀が記されている。

丁酉、貞う。蝗あつまる。…五牢…牛を𠄎せんか。𠄎とは、焼いて煙をあげ供物を天上にとどける祭儀である。この卜辞では、神に五頭の羊と…頭の牛を𠄎すればよいかと伺っている。

5. 𧈧から蝗へ

殷は、蝗を𧈧という文字で記した。では𧈧の音はといえば、それはきつとシュウである。最も古い蝗の記録は、周代に書かれた『春秋』や『詩』に見えるもので、そこには𧈧と書かれている⁽²⁰⁾。周代には、まだ、蝗の文字がなく、𧈧と書かれていたのである。漢代の字書『説文』は、𧈧とは蝗のことであり、𧈧は古文の終の字に従って声を得たとしている。古文とは、春秋時代末期の東方六国の文字をさす。当方六国は、殷の文化を受け継いだ地域である。

𧈧、蝗也、从𧈧𠄎声、𠄎古文終字、（卷13下）

この『説文』の説明によって、𧈧の音はシュウであったと推測する。

殷人がなぜ𧈧をシュウとよんだかについては、彭邦炯が、蝗を焼殺するときに発したシュウシュウという鳴き声によるものであろうと説いている⁽²¹⁾。これは興味深い説であるが、しかしもしかすると、これは無数のバツタが草を噛むときの音かもしれない。またバツタが飛行するときの音かもしれない。これはまだ疑問である。

𧈧がどのようにして𧈧、𧈧という文字となったかについては、彭邦炯の説に説得力がある。彭氏はまた、𧈧から秋の字ができたとしている。こうした説をまとめた衍化図を図6に引く。『説文』の禾部（巻7上）に𧈧という籀文が引かれているが、この文字も彭氏の説を裏付けるものになろう。𧈧は禾と火と亀から成っている。籀文

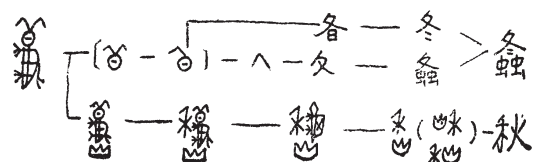


図6 𧈧・秋 両字の衍化示意图

とは、殷周の字体に近いとされる秦の字体である。

蝗という文字が文献に初めて現れるのは、秦の呂不韋撰『呂氏春秋』に、

匡章謂恵子於魏王之前曰、蝗螟、農夫得而殺之、奚故、為其害稼也、(卷 18、不屈)

とあり、また彼が書いたとされる『礼記』月令に

孟夏行春令、則蝗蟲為災、暴風來格、秀草不実、仲冬行春令、則蝗蟲為敗、水泉咸竭、民多疥癩、とあるものである。前述したように『説文』は、蝗と蠡は同じものだといっている。

蝗、蠡也、从虫皇声、(卷 13 上)

また『説文』は、蠡という字を載せて、これも蠡だという。

蠡、蠡也、从虫庶声、(卷 13 上)

また漢の揚雄撰とされる『方言』は、蟥という字を載せて、次のようにいっている。() 内は晋の郭璞の注である。

蟥(即蝗也、莫鯁反)、宋魏之間、謂之蚘(音貸)、南楚之外、謂之蠡(音近詐、亦呼吒蛸)、或謂之蟥、或謂之蠡(音賸)、(卷 11)

これらによれば、蝗が地域によって様々な名称で呼ばれていたことが明らかである。

以上の記事や解説をもとにすれば、蝗という文字は周代末に某地域で作られたものであろう。その某地域とは、秦である可能性が高い。蝗の旁は皇である。秦では皇帝という称号が作られた。皇帝の皇の字は、大、美、天神という意味である。巨大で恐ろしいトノサマバッタには皇の字がふさわしいとして蝗という文字が作られたのではなかろうか。確かなことは分からないが、いずれにしても蝗という文字とコウという音が、秦漢帝国の勢力拡大とともに中国全土に広がったことは間違いない。

結び

殷の国は蝗害に見舞われる地域にあった。殷人が甲骨に記した卜辞の中には、確かに蝗を示す文字が認められる。𧈧がそれである。

卜辞によれば、殷の人々も、やはり蝗を大変な脅威と捉えていたことが明らかである。このため彼らは夏・秋の時期を「蝗が襲来する季節」と呼んでいた。現在の秋という文字は、おそらくこの季節に蝗を焼殺したことから生まれたものであろう。

卜辞によれば、殷の人々は蝗災を神の祟りと捉えていたと考えられる。このため蝗の心配が生じ、あるいは蝗に襲われると、国王は大祭や臨時の祭祀を行った。貞卜によって神の意思を伺い、犠牲や宝石を捧げて、神の祟りを鎮めるよう努めた。大祭では殷の最高神の帝が祭ら

れた。臨時の祭祀では黄河、山嶽や蔑、夔、王亥、上甲らの祖先神が祭られた。祖先神を祭った主な理由は、祖先神が河や山嶽と同様、農耕に直結した神だったからであろう。

拙稿が甲骨文字と卜辞によって明らかにしたのは、以上である。中国の蝗災対策史から見れば、殷は祭蝗の時代であった。殷に替わって周が立つと、神意を直接伺う貞卜は廃れた。蝗に対する祭祀は、八蜡と称する国家祭祀において、災害をもたらさないようひたすら神に祈願する形に変わった。八蜡の祭りは、やがて民間に広まり、民間信仰の馭蝗神とともに図 2 に示した地域に廟が建てられるようになった。

註

- (1) 徐光啓「除蝗疏」(『農政全書』卷 44)
國家不務畜積、不備兇饑人事之失也、兇饑之因有三、曰水、曰旱、曰蝗、地有高卑、雨澤有偏、被水旱為災、尚多倖免之處、惟旱極而蝗、數千裏間草木皆盡、或牛馬幡幟皆盡、其害尤慘過於水旱者也、
- (2) 拙稿「中国蝗災対策史—蝗は天災か人災か—」(『東海女子大学紀要』22、2003)
- (3) 馬世駿「東亜飛蝗在中国的發生動態」(『昆虫學報』第 8 卷第 1 期、1958)
- (4) 陳正祥「中国方志の地理學價值」第 5 章(香港中文大學出版、1965)
- (5) 註 2 を見よ
- (6) 中国社会科学院考古研究所編『甲骨文編』卷 13 (1965)
- (7) 島邦男『殷墟卜辭綜類』(大安、1967)
拙稿の卜辭資料は全て『殷墟卜辭綜類』所収のものを使用した。『殷墟卜辭綜類』に基づいた資料は、表 2 にまとめた。
- (8) 周堯「中国古代昆虫研究方面的成就」(『科学史文集』4、上海科学技術出版社、1980)
- (9) 『詩』国風、周南
蠡斯羽、訕訕兮、宜爾子孫、振振兮、
- (10) 葉玉森『鞏契枝譚』夏(1924)、『殷墟書契前編集釈』(大東書局、1934)
- (11) 郭沫若『殷契粹編考釋』(文求堂、1937)
- (12) 松丸道雄・高嶋謙一編『甲骨文字字釋綜覽』(東京大學出版會、1994)
- (13) 彭邦炯「商人卜蟲說—兼說甲骨文的秋字」(『農業考古』1983-2)
- (14) 『詩』小雅、甫田之什、大田に、周代の害虫焼殺が見える。蝗も、この螟・蠡・蠹・賊の中に含まれていたと考えられる。
既方既早、既堅既好、不稂不莠、去其螟蠡、及其蠹賊、無害我田穡、田祖有神、秉畀炎火、
- (15) 島邦男『殷墟卜辭研究』第 1 篇(中国学研究会、1958)
- (16) 同上
- (17) 白川静『甲骨文の世界—古代殷王朝の構造』第 2 章(平凡社東洋文庫 204、1972)
- (18) 註 15 を見よ
- (19) 徐中舒『甲骨文字典』(四川辭書出版社、1988)
- (20) 註 2 を見よ
- (21) 註 13 を見よ

表1 『殷墟卜辞総類』所載 **帝蝗** (帝蝗)

(各卜辞資料の出所は表2を見よ)

1	帝蝗	帝蝗
2	卜五五二 貞 帝蝗 于 土 于 土	貞 帝蝗 于 土 于 土
3	" 于 土 于 土 ... 帝 ... 蝗 ...	戊 申 卜 : 貞 : 蝗 :
4	甲 三 五 三 ... 帝 蝗 ...	: 帝 蝗 :
5	前 五 五 五 帝 蝗 于 土 于 土 帝 蝗 帝 蝗 帝 蝗 帝 蝗	庚 戌 卜 貞 帝 蝗 帝 蝗 帝 蝗 帝 蝗 帝 蝗
6	綴 八 五 帝 蝗 于 土 于 土 帝 蝗 帝 蝗 ... 口 三 月	庚 戌 卜 貞 帝 蝗 告 : 丁 四 月
7	南 帝 蝗 于 土 于 土 帝 蝗 帝 蝗	壬 子 貞 牛 米 帝 蝗
8	" 于 土 于 土 帝 蝗	从 牛 米 帝 蝗
9	外 田 二 八 工 ... 帝 ... 蝗 ...	壬 : 貞 : 米 : 蝗
10	" 于 土 于 土 帝 蝗 帝 蝗	从 牛 米 帝 蝗 帝 蝗
11	粹 一 二 帝 蝗 帝 蝗 帝 蝗 帝 蝗 帝 蝗 帝 蝗 帝 蝗 帝 蝗	庚 寅 貞 蝗 大 集 于 帝 五 玉 臣 寧 在 祖 乙 宗 卜
12	告蝗	告蝗
13	林 三 六 三 帝 蝗 于 土 于 土 帝 蝗 帝 蝗 ... 口 三 月 (類 八 五 五)	庚 戌 卜 貞 帝 蝗 告 : 丁 四 月
14	" ... 帝 ... 蝗 ... 至 ... 四 月	: : 卜 : 蝗 : 至 : : 四 月
15	佚 五 二 五 十 多 于 帝 蝗 帝 蝗 于 河 (包 三)	甲 申 卜 貞 帝 蝗 告 蝗 于 河
16	南 帝 蝗 帝 蝗 ... 于 河 ... 帝 蝗	: 未 卜 貞 帝 蝗 于 河 : 蝗
17	甲 三 四 二 于 帝 蝗 于 土 于 土 ... 帝 蝗 帝 蝗	乙 未 卜 貞 帝 蝗 于 土 于 土 : 蝗 帝 蝗
18	粹 一 九 六 于 帝 蝗 于 土 于 土 告 蝗 帝 蝗 (三 五 三)	乙 未 卜 貞 帝 蝗 于 土 于 土 告 蝗 帝 蝗
19	" 于 帝 蝗 于 土 于 土 告 蝗 帝 蝗	乙 未 卜 貞 帝 蝗 于 土 于 土 告 蝗 帝 蝗
20	粹 一 九 七 于 帝 蝗 于 土 于 土 告 蝗 帝 蝗 (三 五 二)	貞 于 王 亥 告 蝗 帝 蝗
21	林 三 六 三 口 帝 蝗 ... 帝 蝗 ... 帝 蝗	丁 巳 : 告 蝗 : 西 邑 七 月
22	林 三 七 〇 帝 蝗 ... 帝 蝗 ... 帝 蝗	貞 蝗 : 其 告 : 帝 蝗
23	粹 四 四 帝 蝗 帝 蝗	其 告 蝗 上 甲
24	粹 八 八 帝 蝗 帝 蝗 二 帝 蝗	其 告 蝗 上 甲 二 帝 蝗
25	南 帝 蝗 帝 蝗 ... 帝 蝗 ... 帝 蝗	: 其 尋 告 蝗 :
26	南 帝 蝗 帝 蝗 ... 帝 蝗 ... 帝 蝗	壬 : 其 尋 告 蝗 于 :
27	" 于 帝 蝗 于 土 于 土	从 告 蝗 于 上 甲
28	京 三 六 八 帝 蝗 ... 于 帝 蝗 帝 蝗	庚 寅 : 于 帝 蝗 告 蝗
29	粹 一 四 ... 帝 ... 蝗 ... 帝 ... 蝗 ...	: 貞 : 蝗 : 帝 : 牛

30	粹 二 … 乙未貞告蝗集于高祖夔六牛	： 戊貞其告蝗集于高祖夔六牛
31	人三三三工乙未貞告蝗集于高…	壬戌貞其告蝗集于高：
32	商明六甲未貞告蝗用自上甲	貞來告蝗用自上甲
33	𠄎𠄎𠄎	寧 蝗
34	存二二三… 告蝗… 𠄎 (録四七)	： 蝗 毋： 寧
35	攘續 二 … 乙未貞告蝗于… (録二五五)	乙亥卜其寧蝗于…
36	甲三三三 丙未貞告蝗來辛卯彭	貞其寧蝗來辛卯彭
37	商明六甲未貞告蝗	庚辰貞其寧蝗
38	粹一 二 甲… 告蝗… 于帝五王臣寧在祖乙宗卜	庚寅貞蝗大集于帝五王臣寧在祖乙宗卜
39	𠄎𠄎𠄎 · 𠄎𠄎𠄎	蝗 毋 · 蝗 集
40	存二二三… 告蝗… 𠄎 (録四七)	： 蝗 毋： 寧
41	存二九六… 乙未貞告蝗于上甲告蝗毋	乙未卜賓貞于上甲告蝗毋
42	里三三三… 乙未貞告蝗于嶽： 蝗 毋	乙未卜賓貞于嶽： 蝗 毋
43	存二九七… 貞于王亥告蝗 毋 (録五三)	貞于王亥告蝗 毋
44	存二九八… 乙酉卜賓貞蝗大毋佳： (外五六)	乙酉卜賓貞蝗大毋佳：
45	林三五九… 兇： 蝗： 毋至商六月	： 兇： 蝗： 毋至商六月
46	佚三九… 蝗不毋散	： 蝗不毋散
47	人三三三工乙未貞告蝗集于高…	壬戌貞告蝗集于高：
48	粹 二 … 乙未貞告蝗集于高祖夔	： 戊貞告蝗集于高祖夔
49	粹一 二 甲… 告蝗… 于帝五王臣寧在祖乙宗卜	庚寅貞蝗大集于帝五王臣寧在祖乙宗卜
50	遺六三三 丙未貞告蝗集： 癸五年： 牛	丁酉貞蝗集： 癸五年： 牛
51	拾七三… 告蝗… 米…	： 蝗 集： 癸：
52	人三三三 丙未貞告蝗不集	丁酉貞蝗不集
53	“ 𠄎𠄎𠄎 (或 𠄎𠄎𠄎)	其集蝗 (其蝗集)
54	𠄎𠄎𠄎	蝗 至
55	林三五九… 兇： 蝗： 毋至商六月	： 兇： 蝗： 毋至商六月
56	大六六七 甲未貞告蝗不至茲商二月	庚申卜(比) 貞今歲蝗不至茲商二月
57	“ 𠄎𠄎𠄎	貞蝗其至
58	佚七二 癸酉貞告蝗不至	癸酉貞蝗不至
59	林二六三… 卜： 蝗： 至： 四月	： 卜： 蝗： 至： 四月

60	来蝗		来蝗
61	依九六一牛牛卜来蝗	存三四	戊戌卜般貞祈祀来蝗
62	甲三三三牛牛卜来蝗		戊戌卜般貞祈祀来蝗
63	于蝗		于蝗
64	合二五五来蝗		貞雚芻于蝗
65	来蝗		貞雚芻勿：蝗
66	合二八八来蝗		雚芻勿于蝗
67	乙三三七来蝗		貞雚芻于蝗
68	今秋		今秋
69	在二五。牛牛卜今秋		戊寅卜賓貞今秋且方其征于鬻
70	合三。田前牛牛卜今秋	(存四五)	庚寅卜賓貞今秋王往：
71	合三三三：今秋	(存六九)	：今秋其侑降鼓
72	合三三三：今秋		：賓貞更今秋：
73	甲三三三：今秋		：今秋勿戒至函
74	乙三三三：今秋		：今秋：
75	合三三三：今秋		：今秋品禾
76	合三三三：今秋		：今秋：衣：
77	合三三三：今秋		：今秋：
78	合三三三：今秋	(存四三)	更今秋
79	合三三三：今秋		癸丑貞今秋其降
80	合三三三：今秋		乙亥卜今秋多雨
81	合三三三：今秋		辛巳令卜今秋我步兹
82	合三三三：今秋		戊寅卜我貞今秋我入商
83	合三三三：今秋		：今秋：更：告：
84	合三三三：今秋		：今秋：
85	合三三三：今秋		：卜今秋：
86	合三三三：今秋		庚寅王卜在教貞余其皇在兹二山今秋 其皇其乎示于商正余受侑王占曰吉

87	其他	其他
88	存二既三父才一内萬中夕竹 (宗變五七)	癸丑卜貞蝗在斤斫
89	“ … 蝗… 蝗… ”	： 栗： 蝗：
90	存二九八父才一… 蝗… (宗元五四)	癸巳卜： 蝗：
91	前天五三工出… 蝗… 蝗…	壬子： 貞： 蝗：
92	明五五二… 一… 蝗… 蝗	： 卜： 變： 蝗
93	粹九四六尊父才合… 蝗… 蝗… 田 (宗元六八) (存二九七九)	貞蝗令鼻 貞 蝗 令鼻田
94	文三。三… 蝗于商 (宗七二)	： 蝗于商
95	存二六三内帝幼	貞蝗
96	庚三。三… 蝗	貞： 蝗
97	裕七。四… 蝗… 多…	： 蝗： 多：
98	鐵五三二… 蝗… 蝗… 蝗… 蝗…	蝗 蝗 蝗 蝗
99	蝗	蝗
100	後五二… 史己未… 蝗… 自父圍…	： 史己未… 蝗… 自父圍：
101	上一四… 旬亡禍… 蝗… 自父… 六人八月	： 旬亡禍： 蝗… 自父… 六人八月
102	秋	秋
103	粹一五二爻合… 蝗… (宗四六四)	貞今秋
104	後三三二口米… 蝗… 今秋王其从	丁未卜受貞… 今秋王其从
105	… 蝗… 今秋王其大史	丁丑貞今秋王其大史
106	… 蝗… 庚申卜今秋亡丞之七月 (宗元六八) (存二九七九)	庚申卜今秋亡丞之七月

表2 『殷墟卜辞綜類』綜集書目

鐵	鐵雲藏書龜	劉鶚	1903	六	甲骨六錄	胡厚宣	1945
前	殷虛書契前編	羅振玉	1912	甲	小屯・殷虛文字甲編	董作賓	1948
後	殷虛書契後編	羅振玉	1916	乙	小屯・殷虛文字乙編	董作賓	1949
明	殷虛卜辭	明義士	1917	摭續	殷契摭佚續編	李璽農	1950
林	龜甲獸骨文字	林泰輔	1921	寧	戰後寧滬新獲甲骨集	胡厚宣	1951
拾	鐵雲藏龜拾遺	葉玉森	1925	南	戰後南北所見甲骨錄	胡厚宣	1951
卜	殷契卜辭	容庚	1933	掇	殷契拾掇	郭若愚	1953
佚	殷契佚存	商承祚	1933	京	戰後京津新獲甲骨集	胡厚宣	1954
庫	庫方二氏藏甲骨卜辭	方法敏	1935	存	甲骨續存	胡厚宣	1955
文	甲骨文錄	孫海波	1937	外	殷虛文字外編	董作賓	1955
粹	殷契粹編	郭沫若	1937	巴	巴黎所見甲骨錄	饒宗頤	1956
天	天壤閣甲骨文存	唐蘭	1939	人	京都大学人文科学研究所藏甲骨文字		
遺	殷契遺珠	金祖同	1939			貝塚茂樹	1959
安	河南安陽遺寶	梅原末治	1940	綴	甲骨綴合編	曾毅公	1950
坎	Bone Culture of Ancient China W. C. White		1945	合	殷虛文字綴合	郭若愚	1955